



Georg Heymの詩について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-06-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 市川, 勝治 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/3326

Georg Heym の 詩 について

市川 勝 治

Über die Gedichte Georg Heyms

Katsuharu Ichikawa

Zusammenfassung

Hier in diesem kleinen Aufsatz behandle ich die Gedichte Georg Heyms (1887-1912), der mit Georg Trakl die deutsche früh-expressionistische Periode repräsentiert.

Das, was ihn besonders be- und auszeichnet, ist die visionäre Tätigkeit seiner Seele. Mit seinen—oft furchtbarsten Visionen hat er, trotz seines kurzen Erdenlebens, die Welt der Dichtung aufs äußerste bereichert.

Er war, sowohl geistig wie auch körperlich, sehr vitaler, leidenschaftlicher Mensch. Aber gerade wegen dieser Leidenschaft und Vitalität erstickte er fast an der Wirklichkeit, und bekam den tiefen Pessimismus und das revolutionäre Pathos.

Hinter dem Fortschritt der Zivilisation und dem materiellen Gedeihen der Zeit, hat er immer den Tod und Untergang der Menschheit vorausgesehen. Er schilderte die Verfluchung der Großstädte, deren Steinwüste seine Dichtungsquelle nährte. Zu Großstädten hatte er die Haß-Liebe in dem wahren Sinne des Wortes.

Sein Pessimismus hat die weltanschauliche Tiefe und Weite erreicht, und da kam die Vision des Kriegs.

Im Vergleich zum Schuldbewußtsein Trakls, ist bei Heym die Gesinnung zum Herrschen und Strafen zu bemerken. Wenn sie beide auch gleichfalls prophetische Dichter sind, die Verfluchungsvisionen Heyms nehmen doch eher die Richtung nach der Heldenhaftigkeit des Mythos, während die Untergangsvisionen Trakls die apokalyptische Grausamkeit tragen.

I.

Georg Trakl と共に、表現主義の時代を代表する詩人である Georg Heym (1887-1912) について、その詩のいくつかを見ながら考えて行きたい。

同じく 1887 年生れの Trakl が、看護将校として出征した Galizien の戦線で、狂気の中に、恐らくは自殺と考えられる死——薬物の多量摂取——を遂げたのは、1914 年 11 月、大戦がはじまって間もなくの事であった。僅か 27

歳で世を去った Trakl の数少い詩には、我々の心を、その根底からゆるがす様な、切實なひびきがある。このひびきの純粹さは、おそらく Trakl 一回限りのものであろう。そして、その不安定な死とは、およそ対照的な彼の詩の完成度も¹⁾。

Georg Heym は、更に若く 24 才でこの世を去った。しかも矢張り普通の死ではない。彼は水に沈んで死んだのであった。期せずして同じ時代に、類似した星の下に生まれた二人の詩人の作品が、お互いに、時として、非常に他を思いおこさせる事があるのは、当然の事かも知れない。私自身の関心に則して言えば、Trakl を思わせる Heym の詩に、しばしばぶっかると言う事にならうか。然し、それは飽くまでも一つの問題であって、Heym はそれ自身で一個の存在なのであり、Trakl と共に、表現主義の時代を、最も代表する詩人である事に変わりはない。

Heym の資質、性格は、Trakl と非常に異なって居り、従って、両者の詩空間には大きな違いがある。大まかに言えば、Trakl の内面性に対して、Heym のペンミズムは極めて外向的であり、時として華麗であり、又、ディラムビッシュ dithyrambisch でもある。ほろびを耐える者として、Trakl には、常に恩寵への予感——志向とまでは言えなくとも——があったのに対し、Heym の期待するのは、むしろギリシャの神々であった。彼の短い生涯は、それを極めて断片的なものにとどめてしまったが、Heym の心は、結局、英雄の世界に向って居たのではなからうか。その意味で、彼を表現主義者と言うより、むしろ古典主義のシュールレアリスティックな変種ではないかと考える友人の感想²⁾は、案外当って居るかも知れない。

しかし、その現われ方は異なるにしても、両者に共通して言える事、そしてそれ故、私の心にかかわって来るのは、その描く Vision の世界である。表現主義とは何かを、全般的に考える事は、到底私の力に負える事ではない。或いは、その功罪をあげつらう事も。ただ言い得るのは、現実——見ただけの現実に、首までひたり切った自然主義、或いは、その情緒的延長の印象主義の、とりすました観照に、死ぬ程倦怠を感じた 1910 年代の若者達が、既

成の世界を越えて、一段高い現実を期待する理想主義的な希求から、ただ彼等自身の心の内の叫びを、投げつけたのだと言う事だけだ。

勿論、それは、初期の新鮮さを失えば、空疎な、おー、人間よ、と言う常套の型 (O-Menschen-Stil) に墮してしまいか、或いは、現実の否定に発して、単なる畸型、異常の好みへと変って行くかするであろう。純粹であるだけに、変質しやすいもろさを、たしかに表現主義は持って居た。それは、一回の叫びでこと足りるのであり、持続する心ではないのかも知れぬ。19世紀のリアリズムの作家達が、何れも長命であるに対し、表現主義の代表的な——或いは、先駆的な詩人として考えられる Trakl, Heym が、いづれも二十代の若さで、この世を去るのは、矢張り表現主義と言う、切迫した息づかいに關係する事なのだろうか。

しかし、この表現主義が、決定的に詩の世界を豊富にしたのは、その visionär な心の働きであった。彼等は自己の Vision を現実に優先させ、現実の人間世界は、詩人の描く Vision の中で、もろくも崩れ去って行く。見かけの堅固さのかげにひそむ頹廢と没落が仮借なくつかみ出される。そして、言わば、この嵐をはらんだ、遙かに多く荷電された心象の現実を貫いて流れるのは、詩人の悲しみであり、嘆きであり、怒りであり、そして予感であるのだ。表現主義者達は、その Vision に依って、近附くカタストロフを描き上げたのだった。

表現主義者達は、自己の Vision にさからう一切の現実を受け入れなかった。上べだけの華麗、繁栄を憎悪し、その背後にかくれた没落を、文明の不毛さを、大都會の石の荒野 (Steinwüste) を、おそれと、おどろきと、怒りの眼で観じとって、新たな人間の運命の回復を叫びつづけるのだ。おそらく、それは、突然眼の前に現われた深淵でもあったろう。そして若者達は、その黒い深淵をのぞき込んだのだ。心に、はげしい苦悩を感じながら。

そして、この苦悩と言う契機が、表現主義の運動を、単なる青春の空騒ぎに終わらせなかったのだ。怒りであり、嘆きであり、或いは狂いであっても、苦悩に依って、それは恣意ではなくなる。苦悩が、幸福よりも豊かにする。

(Leiden macht reicher, denn das Glück.)³⁾ 結局、この精神性が、Heym に、又時代の若者達に、発言権を持たせたのだった。

Heym の描く死の Vision, 大都会の Vision, そして戦争の Vision. 彼の脳骨の内側には、異様に染め上げられた無数の Heym 的現実が、表現されるのを待って居たのだ。この Vision の豊富さが、極く少数の表現主義者の名を不滅のものにする。しかも、不思議な事に、これらの代表的な表現主義詩人達こそ、既に、表現主義の枠内におさまっては居ないのだ。Trakl は飽くまでも Trakl であり、Heym は余りにも Heym でありすぎる。彼等は、彼等自身である事に依って、——意識しようとしまいと——人類すべての運命にかかわって来る、あの大詩人達の列につらなっているのである。

Heym の詩作品は、未完成のものもふくめて、その数は、彼の詩作の期間を考えれば、非常に多い。従って、比較的無駄もあるように思われるが、或いは、この豊富さが、矢張り Heym なのかも知れない。ここでは、後期——1910年以降——の詩にかぎって、しかも、私の理解の近附ける範囲で考えて行きたい。参考となる文献も、余り手に入っていないので、殆ど Heym の詩とだけ向いあう形になった。

II.

Georg Heym の死は、唐突に訪れる。それは1912年1月16日、ベルリン近郊の Havel 河の上での事であった。Heym は友人達とスケートに興じて居たのであるが、河岸の目撃者の話に依ると、その時、友人の一人 Ernst Balcke が、突然、あたかも自殺する積りのように、氷の割目にとびこみ、それを救おうとした Heym も、続いて水中に没し、共にそのまま、溺死したと言う事である⁴⁾。あれ程生命に富み、当時、ベルリンのカフェに集まる若き詩人達のアイドルであった Heym の死は、このように飽気ないものであった。

24歳で世を去る詩人が、常に死の、或いは自己の死の状景を、予感として思い描いて居るのは不思議ではない。往々考えられるのとは逆に、若者達の

方が、むしろ、より死に近附いた老年より多く、死を思い、死を語るものらしい。ただそれが、何等心の屈折を持たぬロマンティズムに終わるか、或いは、Vision、しばしば凄絶な Vision に到るか。そこに凡俗と詩人のわかれが出て来るのであろう。

Heym の水死は偶然であった。然し、彼の詩にしばしば水底での死が歌われるとすれば、それはもう単なる偶然ではなくて、矢張り、詩人の運命への予感、或いは、詩と死の不思議な結びつきと言った思いに、我々を誘うのである。

何時の時代でも、Ophelia は詩人の魂を動かす好個の材料であるらしい。Heym の Ophelia 詩は、Shakespeare の戯曲よりは、彼が最も影響を受けた Rimbaud の同名の詩からヒントを得て作られたのであろう。

髪の中には、河ねづみの仔の巢、
指輪をはめた手を、水の上に、ひれのように浮べて、
彼女は、水面に静かにうつる
広い太古の森の影の中を流れて行く。

闇に迷ふ名残りの太陽は、
彼女の脳の中、深く沈む。
なぜ彼女は死んだのだ。なぜ彼女はこんなにも一人で、
しだや雑草をもつれさせる水の中を、流れて行くのだ。

Im Haar ein Nest von jungen Wasserratten,
Und die beringten Hände auf der Flut
Wie Flossen, also treibt sie durch den Schatten
Des großen Urwalds, der im Wasser ruht.

Die letzte Sonne, die im Dunkel irrt,
Versenkt sich tief in ihres Hirnes Schrein.
Warum sie starb? Warum sie so allein
Im Wasser treibt, das Farn und Kraut verwirrt⁵⁾?

然し、表現主義時代の Ophelia は、もうロマンティックな美しさなどを持ち合せては居ない。それは、都会の汚水と、汽船の廃油にまみれた無慚な姿に変わりはてる。

灰色の岸壁に、マストがそびえ立つ。

朝まだきの赤い空へ、森の焼けあとのように、

かなくそ色に黒々と。動かぬ水が、

くづれかかった倉庫のならびを、ちっと見て居る。

鈍いひびき。汐は岸に沿って帰って来る。

都会の夜の汚水は、流れの上を

白い膜のようにただよい、

ドックに休んでる汽船の腹にこびりつく。

ごみ、果物、紙が厚い層となり、

汽船の管と言う管から、汚物が流れ出る。

白い踊りの衣裳が来る。油でぎらぎら光る水の^も面に、

むき出しの首。そして鉛色の顔。

Die Masten ragen an dem grauen Wall

Wie ein verbrannter Wald ins frühe Rot,

So schwarz wie Schlacke. Wo das Wasser tot

Zu Speichern stiert, die morsch und im Verfall.

Dumpf tönt der Schall, da wiederkehrt die Flut,

Den Kai entlang. Der Stadtnacht Spülicht treibt

Wie eine weiße Haut im Strom und reibt

Sich an dem Dampfer, der im Docke ruht.

Staub, Obst, Papier, in einer dicken Schicht,

So treibt der Kot aus seinen Röhren ganz.

Ein weißes Tanzkleid kommt, in fettem Glanz

Ein nackter Hals und bleiweiß ein Gesicht⁶⁾.

Ophelia 詩の流麗さより、このうつ陶しき、どす黒さが Heym の本来であろう。Heym にとって、都会が特別の意味を持つのであるが、この詩はむしろ後述のベルリン連作などの、都会の Vision につながるものかも知れない。この様な Ophelia を描きたいと言うのは、大戦前夜の若き詩人達に、随分共通した思いではなかったろうか。それは美しきものを汚さんが為ではなく、むしろ美しきものを守りたい為なのだ。bürgerlich な時代の Banalität が、美に耐えられなくなったと感じた時、彼等は汚きもの、みにくきもので、美しきものの化粧をした。表現主義の青春——或いはただ、青春にだけ許された特権と言う気がするが、誤りであろうか。

“恋人達の死” Der Tod der Liebenden に於ては、西欧の詩には珍しく情死が歌われる。ここでは、死が官能的にやさしいものとしてあらわれるが、彼の詩では、しばしば死がエロスと結びつく。

我々は、海底の影多い森で、
 何時も、お互いのそばに居ることだろう。
 同じ波が、我々を暗い所へ運び、
 同じ夢を、我々のくちづけは飲むであろう。

死はやさしい。誰も我々には与へなかったもの、
 故郷を、それは与へて呉れる。そしてそのマントに包んで、
 死は、やさしく我々を、暗い墓へとつれて行く。
 そこでは既に、多くの者たちが静かな国に、眠って居るのだ。

Wir werden immer beieinander bleiben
 Im schattenhaften Walde auf dem Grunde.
 Die gleiche Woge wird uns dunkel treiben,
 Und gleiche Träume trinkt der Kuß vom Munde.

Der Tod ist sanft. Und die uns niemand gab,
 Er gibt uns Heimat. Und er trägt uns weich
 In seinem Mantel in das dunkle Grab,
 Wo viele schlafen schon im stillen Reich?).

次の詩行を読む時、私は、「あたかも自殺する積りのように」、氷の割目にとびこんだのは、友人ではなくて、実は Heym 自身だったのではなかったのかと言う気がして来るのだ。

彼は、盲目の大波の中に歩み入る。

水草は水の底からはい上り、

みるみる彼の足は、引きこまれて行く。彼は水を呑み、

のどをごろごろ鳴らす。水が、のどをふさいでしまう。

Er tritt hinunter in die blinden Wogen.

Die Wasserpflanzen klettern auf vom Grund,

Die FüÙe werden schnell ihm fortgezogen.

Er schluckt und gurgelt. Wasser füllt den Schlund⁸⁾.

更に、次の詩行では、詩人は自己の死と対話をして居る。水死と言う不慮の事故で閉じるその短い生涯も、その詩業に於ては、予感として全きものとなって居るのだ。詩人の心の不思議。我々の何故 Warum? も、いかにして Wie? も、通用しない領域なのであろう。

私が死のうとして居る時、蛙よ、驚いた顔で私を見るな。

葦よ、ざわめくな。灰色の水よ、静かであれ。

^{みなも}
水面よ、おだやかであれ。私はお前のもとへ行く、

さすらい人が一人、死者達の家に入って行くように。

おごそかな気がする。そして、いまわしき悩みも消え去った。

そして、私の心は、広間のように澄んで居る。

すべての(不明語)〈大地〉を、我々は遠くへしめだした。

そして私は、岸の貝殻の国へと歩み入る。

.....
.....

そして夜は、影暗く、涼しく吹きわたり、

私は、なほ沈み行く石のようだ。
 魚共が、すでに、私に喰いついて、水底へ引ずりこむ。
 葦よ、橋よ、船よ、雲よ、さらば。

Begaffe mich nicht, Frosch, wenn ich sterben will.
 Schilf, nicht rausche. Und graues Wasser [sei] still.
 Fläche sei ruhig. Ich komme zu dir herein,
 Wie ein Wandrer tritt in das Haus der Gestorbenen ein.

Feierlich ist mir. Und fort ist die böse Qual.
 Und meine Seele ist rein, wie ein weiter Saal.
 Alle (*unl. Wort*) <Erde> haben wir fern verbannt.
 Da ich trete in Küsten-und Muschelland.

.....

Und die Nacht weht schattig und kühl,
 Wie ein Stein bin ich noch, der herunterfällt.
 Mancher Fisch zupft mich schon, daß ich untergeh.
 Röhricht und Brücken, Schiffe und Wolken ade⁹⁾.

III.

Heym の描いたのは、死の世界であったと言っていい程に、彼の詩には多くの死があらわれる。官能的な甘き死は、たちまち消えて、死は奪うもの、ほろぼすものとして、その仮借なき全貌を示して来る。突如死がやって来れば、それは如何にふり払っても、まぬがれる事は出来ない。肉体はくづれ、蛆虫が這い、空しく骨は風に鳴る。詩人は、死の異様さにおどろき、彼の眺める世界は、すべて死の色にそまり、死に君臨されて、到来する没落の縁に立たされる。野をわたる死者達のつらなり、絞首された者達のおぞましき Totentanz。詩人の心の網膜に結ぶ現実世界の映像は、そのままモルグとなり、地獄の聖晩餐となる。

如何に甘き事か、悩みの後に夢を夢み、
 光と大地の中へとくづれ行き、
 もう何ものでもなく、一切からわかれ、
 夜の息吹き of 如く、眠れる者達の国へと
 降り行く事は。……………

Wie stüß ist es, zu träumen nach den Leiden
 Den Traum, in Licht und Erde zu zerfallen,
 Nichts mehr zu sein, von allem abzuscheiden,
 Und wie ein Hauch der Nacht hinabzuwallen,
 Zum Reich der Schläfer……………¹⁰⁾

……………
 我々は、死の家の中で眠りたい。
 闇の中、広い柩の中で、二人して。

……………
 Wie wollten wir im Haus des Todes schlafen.
 Im Dunkel, in dem breiten Sarg zu zweien¹¹⁾.

然し、この官能も、やがてぞっとさせる冷い死の姿に変わり、死の風を吹きこまれて、詩人の心は恐怖におののく。そして死者の不安と息苦しさ。

“これは何だ。闇なのか。何と重い空気。
 僕はどこに居るのだ。”不安にみちて、
 指は、しめった褥の上を走りまわり、
 低い塚穴の中に置かれた棺の、蓋のうらを探る。

“Was ist das? Dunkel? Welche schwere Luft?
 Wo bin ich?” Voller Angst die Finger hasten
 Auf feuchten Kissen hin und oben tasten
 Des Sarges Deckel sie in niedrer Gruft¹²⁾.

おそらくこれは、詩人の生の息苦しさでもあったのだろう。状景として、

これよりはるかに鬼気と気韻に富んで居るが、折口信夫の“死者の書”の書出しが似て居て興味深い¹³⁾。背じえない死へ運命づけられている人間と言うのは、まことにあわれな存在である。逃れられぬものであるだけに、その時までには避けるか、美しく描いてその苦しみをやわらげたいと思うのだ。然し、本質への visionär な透視は、手軽な美化をさまたげる。Heym の描く死は、そのままの醜さであり、おそれである。そして神の居ない死である。“山上の死者たち”“モルグ”“地獄”“黒いヴィジオン”“都会の呪い”等の長詩をはじめ、到る所に死の風が吹き、死神と死者達はその踊りを踊るのだ。

然し、最もおそろしいのは、この様な個々の死の姿ではなく、現実それ自体が、彼にとって既に死に絶えたものとして眺められる事であった。何の感激もなく、ただ日々をつむいで行く呪われた人間達。わづかに息づく人間性も、時代を蔽う邪悪なるものの重さにおしつぶされて行く。神はとくに、その力を失って人間に見捨てられ、このあわれむべき人間をうかがうのは、dämonisch な地底の力。生が生のままで死に変わった世界。それが詩人の描き出す Vision であった。

地下の世界、それは余りにもこの地上と同じだ。

Die Unterwelt, sie gleicht zu sehr der Erde¹⁴⁾:

逆に、地上の世界、それは詩人にとって、余りにも地下の世界と同じなのだ。Heym はこの生のとぎれを、ある時は、殆んど独り言として嘆きの調子で歌い、ある時は、警告の叫びとして、その心地よい午睡の夢から醒めようとせぬ時代に向って投げつける。

何時の時代も、呪はれたものなのであろう。死をまぬがれぬ以上、人間の運命も呪われたものと定まって居る。然し人間の、これは強さと言うのだろうか。それとも弱さと言うべきなのか。人はこの呪いの故にたやすくほろびる事はしない。言わば、眼を閉じる術を心得て、それを倅せと名付ける。然し、矢張り誰か、倅せになれない人間が居なくてはならぬのではないか。或いは、倅せになろうとしない人間が。これは詩人自身の意識には、かかわら

ぬ事である。伝えられる Heym の世俗的な姿は、むしろ極めて、生にみちあふれたものだったが、結局、彼のたどる道は、いわゆる幸福とは縁の遠いものであった。幸福である為には、余りにもその visionär な心の働きの豊かにすぎ、近附くほろびが、その視野から去る事がなかったのだ。その活力の底に、常に苦悩と、怒りと、そしてどうしようもないペンミズムがたたえられて居るのであり、それが夭折する若者の生の凝集度と、不思議な混淆をなして居るのであった。

夭折する者の時ならぬ老成は、時として実に悲痛な自覚の言葉を吐かせるものである。

僕は、僕の道が何処へ行くのか、もうわからない。以前は、すべてがはっきりして居て単純であった。今では、すべてが暗く、ぼらぼらになってしまって居る。

Ich weiß nicht mehr, wo mein Weg hingeht. Frtther war alles klar, einfach. Jetzt ist alles dunkel, auseinander, zerstreut¹⁵).

或いは、

何れの生も道なく、何れの小道も
もつれて居る。そして誰も終りを知らない。
一なるものを見出さんと求めるものは、
彼が、黙し、空しく手を振ってるのを見るだけだ。

Weglos ist jedes Leben. Und verworren
Ein jeder Pfad. Und keiner weiß das Ende,
Und wer da suchet, daß er Einen fände,
Der sieht ihn stumm, und schüttelnd leere Hände¹⁶).

この絶望は切実である。かつての——それが何時の時代だったかは知らぬ。要するに何時でもいいのだ——青春とは、このようなものではなかったろうか。心の底で、この断絶感に触れようとせず、徒らに結びつきの虚像を求め、又、しりぞける甘さが、現代の青春のつまらなさであろう。

五 月

低い扉の上に、しほれたジャスミンの
花たばの匂いが、かすかに流れる。
近づく雨の気配が、
色あせた布のように、灰色の空を蔽いかくす。

遠き夕の影につつまれて、
天のまるみはなほ、黄色い光の中に浮ぶ。
月桂樹の縁を通して、柩の中の子供の上へのように、
夕陽は、死の色を吐く。

Auf eine niedre Mauer strömt ein Strauch
Jasmins verwerkend spärlichen Geruch.
Den grauen Himmel überzieht der Hauch
Des nahen Regens, wie ein blasses Tuch.

Des fernen Abends Schatten deckt den Raum,
Des Rundung noch in gelbes Licht getaucht,
Wie auf ein Kind im Sarg durch Lorbeers Saum
Die Abendsonne tote Farben haucht¹⁷⁾.

Heym には珍しい程に、非常に澄んだひびきを持つ、この詩の底にたたえられて居るのも、死の色である。私はこの詩が好きだが、それは、ひびきの美しさと共に、短い、一見極めておだやかなこの詩の中に、状景が Vision へと転調して行こうとする“思いの深まり”を感じずからだ。Heym 詩の一つの魅力はここにある。それは思いの深まりと言ったゆとりでなくて、もっとも性と性急な、若者のやりきれない心情であったのかも知れぬ。彼の visionär な心の働き、或いは、Nietzsche にもまさると自覚する、その Vitalität は、なまなかに平静な観照を彼に許さなかったのは、極めて当然な事だが、間々、このように控えめな、単純な叙景が、それが本来である彼の激しいパッションにおとらず、或いはむしろ、それにも増して、我々の思いを、むなしきはろびの世界へといざなう事がある。勿論、詩人の意識した

思いの深まりと言うものではないであろう。夭折の詩人には、死も没落も、もっともっと直接的な姿で迫って来たに違いない。然しそれが、詩人の Vision とするものから離れて、言わば、片隅に引っこんだ表現を与えられる時、却って、詩人の意に反してまで深い感動を与える事があるのだ。結局、形象自体に語らせる時、詩は一番大きな力を持つのではなからうか。物が語る時、詩人が一番多く語って居る。これは豊富な Vision を創造した表現主義、或いは表現主義者と言われる詩人達のパラドックスかも知れない。形象自体が語る時、いわゆる詩的なものが消え失せて、詩が生まれるのだ。

例えば“十一月”と題される次の詩は、詩人のころぎす以上に、深い情感をたたえて、ほろびのひびきをひびかせて居る。

盲いた者達が道に立って居る。彼等の大きなまぶたが、
小さな毛皮の様にたれ下って居る。

背後の野の上、塔の先に、
日曜日の鐘が、静かにゆれて動いて居る。

時に、何処か遠くで手廻しオルガンの音。
時に、風にのみ込まれてしまうひびき一つ。
そして心は、いとわず悲しみに身をまかせ、
雲の下を、夏は、はるか後方へと帰って行った。

かみてになほ、何人かの人々が行く。
彼等の黒く高い影。そしてそのマントがひるがえる。
褐色の頭を、風に吹きたわめられて、
ポプラは空高く、ざわめきの音を立てる。

丘を越えて行く者の姿は、遠くかすかに、
光を失って死にはてた太陽に、照らし出される。
そして、山あいの涼けさの上に、
黄色い夕陽が、消えて行く。

Blinde stehen im Weg. Ihre großen Lider
Sind wie kleine Felle heruntergehängt,
Eine Sontagsglocke hinten, die über den Feldern
In der Turmspitze sanft sich schaukelt und schwenkt.

Manchmal ein Leierkasten irgendwo ferne.
Manchmal ein Ton, den der Wind verzehrt.
Und das Herz gibt der Trauer sich gerne,
Unter Wolken, da Sommer so ferne gekehrt.

Oben gehen noch einige Leute
Hoch und schwarz, und ihr Mantel fliegt,
Und die Pappeln sausen über die Himmel,
Braun mit den Köpfen, die Wind verbiegt.

Wer über die Höhen geht, spiegelt sich ferne,
In der winzigen Sonne, lichtlos und tot,
Und über der bergigen Schluchten Kühle
Löschet ein gelbes Abendrot¹⁸⁾.

彼の短い生涯の、最後の数カ月の間に作られたものに、このように思いが底に沈んだ詩が時々見られる。不思議な事だが、死の前の詩に於ては、極めて無駄が省かれるものだ。

IV.

常に死とほろびの Vision の中に生きる Heym 自身は、極めて情熱的な、生命にみちあふれた人間であった。それは肉体的にもそうであって、何れの友人も、彼が極めて動きの活発な、そしてスポーツを愛する青年であった事を語って居る。

彼の描いたのは没落の姿ではあったが、彼自身は決して頹廢した詩人ではなかった。都会の詩人としての彼の師は、Baudelaire であり、Verlaine であり、Rimbaud であったが、その地上的な資質としては、Rimbaud に一番近かったのではあるまいか。Heym のこの physisch な健康さは、Trakl の農夫的な強じんさと共に、彼等の詩に、或る時は深い“慟哭”めいた沈うつ

な力を与えて居る。彼等は、詩的な表現をする詩人らしき存在なのではなくて、根元を歌う詩人そのものであったのだ。それはまことに、時代の病んだ姿と対照を示す力強さであったと言えるだろう。

Heym の健康は、勿論、自足した普通の健康人と言う意味ではなくて、その情熱の過多、そして才分を持つ詩人と、自己を観ずる自負は、大戦前夜と言う不穏な淀みの時代的環境と、著しく不調和な触れ方をして、常に焦慮、苦悩と言う形であらわれ、怠惰な現実への断罪となり、革命的な志向、更にはカタストローフ戦争への期待となってあらわれるのである。

Nietzsche, Kleist, Grabbe, Hölderlin……にくらべて、僕のすぐれて居るのは、どこだろうか。それは、はるかにはるかに生命力に富んで居る事だ。いい意味でも、悪い意味でも。

Was ich vor Nietzsche, Kleist, Grabbe, Hölderlin…voraus habe?
Daß ich viel, viel vitaler bin. Im guten und im schlechten Sinn¹⁹).

この日記の一節は、若者の客気ではあるが、同時にあきらかに彼の自覚の言葉でもあった。或いは、

一点で、僕は彼等 (Byron, Kleist, Grabbe, Büchner 等。筆者註) と、全く似かよって居る。情熱の力と言う点で。

In einem sicher bin ich ihnen verwandt, in der Kraft der Leidenschaft²⁰).

この彼の情熱と言うのは、非常に直截に、direkt なものだ。それは彼が愛を言う時、極めてはっきりして居る。彼の愛の抱き方と言うのは、そのペンミズムの精神性に対して、むしろ非常に形而下的、と言うより非形而上的なものに思われる。彼が愛を言う時、それは極めてはばの狭いもので、殆どの場合、ストレートに世俗的な恋の意である。彼の人生には、何人もの女性が登場して、日記の相当多くの部分が、その事の為に費されて居るが、この数多い愛の何れもが、死に到るほどのものとは思えない。単に官能的と言うの

でもなく、むしろこの direkt な情熱が、先に立って突走って行く様なおもむきがある。感じとしては、如何にその名をと覚えても、結局愛の対象はどうでもよくなってしまっている。恐らく Heym は、恋人としては性急すぎて落第であったろう。

僕は〈愛さ〉ねばならない。それが僕の運命なのだ。

Ich muß eben 〈lieben〉. Und das ist mein Schicksal²¹⁾.

と言う様な先入主みたいものに追いかけられるのであり、従って実らぬ愛からは、直ちに癒える情熱への確信もあったのだ。

一つだけ僕は自慢出来る事がある。僕はすぐ立ち直れると言う事だ。Toni. Emmy. Nelly. Die R…s, Hedy, Mary, Annemarie, Lilly. 何とおそろしい傷だったろう。その傷はもう直ったのだ。そして今の僕は、何と豊かな思いで、あの辛かった日々を眺めて居る事だろう。

Eines macht mich stolz: Wie schnell ich geheilt werde. Die furchtbaren Wunden: Toni. Emmy. Nelly. Die R…s, Hedy, Mary und Annemarie und Lilly. Wie sind sie geheilt, und mit was für einem Gefühl von Reichtum schaue ich jetzt auf diese einst bitteren Stunden²²⁾.

愛に於けるに限らず、Heym のこの弾力、一種の天真爛漫さは独特のものだが、それは一つには、罪意識の有無と言う事に関連して居るように思われる。ここでもまた、Trakl の姿が私の眼の前にちらつくのだが、Trakl のあの罪意識——意識と言うには余りに稀薄な、むしろ罪障性への傾きとでも言うべきもの——から発して、ほろびのままに身をまかす受苦の姿に対して、Heym のとる姿勢は、極めて自負にみちた、挑戦的なものであり、およそ罪の観念は見あたらない。彼にあるのは、むしろ罰、断罪への志向であり、自らを神の地位に置く事であったように思われる。勿論、それは善悪優劣の問題ではなくて、あくまでも二つの個性の違いに過ぎない。何れの側に親近を抱くかは、読む者の、言わば好みにかかわる事であろう。

Heym は、全く正直に、自分を神の子と見なして居る。死の前年の日記に、次のエピソードが出て居る。

朝、特に長く眠った後でゴムの櫛を使うと、僕の髪はパチパチと音がするだけではない。それなら普通だ。それ所か十分位も、とに角櫛を使うたびに、本当に火花が雨のように降るのだ……………実際の所、僕は、それがどうしても、僕が神々の子孫である事を証明してるのだと思いたくなるのだ。

Wenn ich morgens—zumal, wenn ich lange geschlafen habe—meine Haare mit einem Gummikamm kämme, so gibt das nicht nur ein gewöhnliches Knistern. Nein, es gibt ungefähr 10 Minuten lang, so oft ich durchfahre, einen ordentlichenFunkenregen……………In der Tat, ich bin stark geneigt, das für einen Beweis meines göttlichen Ursprungs zu halten²³⁾.

そしてこの神は、決してキリスト教の神ではなくて、ギリシャの神々への予想であろう。或いは、人間の運命を支配する異教の神々である。権力への意志と言うと大袈裟だが、彼には、支配する力への共感があった事はたしかだ。その意味で、若し彼が生き続けたら、ナチになってたかも知れぬと言う意味の、友人の発言²⁴⁾も、それ程突飛なことではないかも知れぬ。英雄性への好みは、たしかに Heym の抱いて居たものである。

Trakl が絶えずほろびの詩人でありながら、同時に、たとえ予感的にもせよ、常にパンと葡萄酒の世界を思い描いて居たのに対し、Heym にとっては、神——宗教的な神は、呪うべく愚かしく、気の抜けたものにすぎない。

僕はお前を呪ふ。神よ。安物の金びか身分の老いたる愚かものよ。

血まみれの幽霊。ひとり、夜さまようものよ。

お前は休むことなく、天から天へといそいで歩きまわる。

新しい苦しみはないかと、いつもお前の分別をすりへらして居る。

……………

……………

しかし、僕はお前より倅せだ。老いたるタイラントよ。
 僕は死ぬ事が出来る。勝利の声を上げて谷間の影の中に行く。
 僕は忘却の川のほとりに眠る。あわれな男よ。
 お前は永遠だ。そしてお前のおぞましき苦しみも、永遠なのだ。

Ich verfluche dich, Gott; alter Narr in dem Flitterstand.
 Blutig Gespenst. Einsamer Nachtwandler, du.
 Du eilst durch die Himmel ohne Rast, ohne Ruh.
 Nach neuer Pein stets zermarterst du deinen Verstand.

.....

Ich bin doch besser daran, als du, alter Tyrann.
 Ich kann sterben. Ich geh in der Schatten Tal
 Im Triumph. Ich schlafe bei Lethe. Du, armseliger Mann
 Bist ewig. Und ewig währst deine grause Qual²⁵⁾.

“冥府の川 Styx”のIIに於ては、救済からすら身を救いたいと言う衝動的な欲求が感ぜられる。神へのこの性急なイロニーは、時代的背景として、世界大戦と言う破局を前にした若者の焦慮の故でもあろう。

詩人としての自覚は、心の内部に住む暗いものへの畏敬をよびおこす。

汝、嵐よ、昼となく夜となく私をかけめぐり、
 私の血の暗い流れの中にすみ、
 私の血を波立たせるものよ。

暗く、謎にみちて、
 私の奥深く君臨するものよ。
 心動かさぬものよ、夕が訪れる時、
 他の誰もが決して、そうは眺めなかったように、
 夏の野、森、
 そして都会を
 眺めよと、私に命ずるものよ。

私をひきさらって、道を行くものよ。

.....

これからなほ、何時までか。

或る日、お前が黒い煙のように立のぼり、

そして、死者達の記念の日の後に、

花でかざられたテーブルを置きさるるように、

私を見捨てるまでか。

Der du, ein Sturm, <mich> durchwanderst Tag und Nacht,

Der du in meines Blutes dunkelen Gängen wohnst.

Der es brausen macht.

Der dunkel und rätzelvoll,

Tief in mir thront.

Ungertührter, der mich zu schauen heißt

Wie nie ein andrer geschaut

Des Sommers Fluren, den Wald

Und die Städte,

Wenn dunkel der Abend graut.

Der du mich durch die Straßen reißt.

.....

Wie lange noch ?

Bis du ausfährst eines Tages,

Wie ein dunkeler Rauch,

Und mich verläßt,

Wie die bekränzte Tafel

Nach einem Totenfest²⁶⁾.

これは、詩人の誇りでもあり、不安でもある。おそらく多くの人間が、これと同じ事を感じたり、考えたりするであろう。然し、このおそれとおののきに身をまかす者だけが、詩人となるのだ。

彼のこの Vitalität は、現実の世界にぶつかって、極めてぎくしゃぐとした反応を示す。彼の生のリズムと、現実のテンポが余りにも喰ひちがいきすぎるのだ。

彼の生の充実と息苦しさは、死、自己に対しては却って早逝の予感となる。それはすでに見た通りだが、書きすぎると言う友人達の非難に対して、Heym は日記にこう答えて居る。

あの連中は、知ったような顔をして、僕は書きすぎると非難する。あわれな奴等だ。たくさん書くからと言って、いいものが簡単に失われる事はない。それに、一体、僕がどれだけ生きれると言うのだ。

Das kleine NÄRRCHEN, Schulz, und auch andere werfen mir pedantisch vor, daß ich zuviel schaffe. Arme Seelen. Was gut ist, verliert nicht durch Quantität. Außerdem, wer weiß, wie lange ich noch lebe²⁷⁾.

詩と言うのは、Trakl に於けるが如く、むしろ寡黙へ向うものではなからうかと私は考えて居るが、Heym のこの豊饒さも、彼の立ちいそいだ死を思へば、納得できない事もない。彼の生を納める為には、現実のキャンパシティが小さすぎる。詩人は無意識の中にそう感じて居たのだ。

彼の心のはげしさは又、現実の生を、死の影の下に眺める事を彼に強いる。それは、自らの崩壊に気付く事を肯ぜぬ、極めて散文的な怠惰な世界への断罪となり、没落の歌をひびかせる事になるのだ。そして、絶望した詩人の心は、そのはげしさのまま、はけ口のないペシミズムへと変り、やがて、呪われた世界を焼きつくすものとして、戦争と言うカタストロフへの期待となるのだ。

何か起ってさへくれたら。又バリケードが築かれるなら。僕は一番先にその上に陣どる事だろう。更に僕は、銃弾に心臓を射ち抜かれて、昂揚した気分の陶醉を感じたい。或いは、戦争が始まって呉れるのでいい。正義の戦いでなくなってもいいんだ。今の平和は、古家具の、にかわの上塗りみたいに、ぐうたらで、油でべとべとして居る。

Geschähe doch einmal etwas. Würden einmal wieder Barrikaden gebaut. Ich wäre der erste, der sich darauf stellte, ich wollte noch mit der Kugel im Herzen den Rausch der Begeisterung spüren. Oder sei es auch nur, daß man einen Krieg begänne, er kann ungerecht sein. Dieser Frieden ist so faul und ölig und schmierig wie eine Leimpolitur auf alten Möbeln²⁸.

勿論、この様な一節だけをとり上げて見れば、何時の世の若者も考えそうなことだが、彼の詩を読み、しかもこれを眺めるなら、私は、彼の心のはげしさと、絶望的な焦燥をつくづくと感じるのだ。自己の外側にある何かの主義主張に拠ってと言う不純さはない。ただ詩人自身の Vision があるだけであり、苦悩が、幸福よりも豊かにすると言う自覚の精神性があるだけだ。

これに類似する文章が、日記中にしばしばあらわれるし、その詩の中にも多いが、私はその熱狂、或いは情熱のかげに、むしろ隠者めいた心の冷え——勿論プラスの意味で言うのだが——を感じる時がある。おそらく、合間合間にあらわれる、ひそやかな、沈んだ調子の詩——前掲の“五月”“十一月”等——の印象が、私には案外強いのと、苦悩をいとわぬ心の態度、更にはその visionär な透視の故であろう。Vision は情熱でもなく、精神でもない。それら単一のものを越えた、詩人の直観的な心の働きであり、詩人自身をも越えて、何時しか人類のすべてにかかわって来るのだ。

僕は、この陳腐な時代の中で、僕の熱狂を眠らせたまま窒息してしまいたい。

—ich ersticke noch mit meinem brachliegenden Enthousiasmus in dieser banalen Zeit²⁹.

結局、志向としての表現主義の土台は、この、時代の Banalität に窒息しそうに感じた所にあるのだろう。この Banalität との戦いが、表現主義者達の願ったものであり、Heym の警告的な Vision の世界も、ここから生れて来るのだ。

V.

都会。Heym にとって、都会——彼の現実の生涯で言えばベルリン——は特別な空間であった。もともと彼は、Schlesien の小さな都市に生れたのだが、その生涯と詩作の場所はベルリンであった。ベルリンと言う大都会を舞台にしてはじめて、彼の詩才が十全の活躍をなし得たのだった。フランス革命の Pathos をよしとする詩人は、パリへの憧れを抱くが、その地を知る事なく終る。彼にとってはベルリンがすべてであった。

Heym のベルリン。或いは一般的に、表現主義者と都会と言う関係になるうか。表現主義は、都会と言う石の荒野 (Steinwüste) の上に開いた花であった。資本主義、大企業、労働問題、帝国主義、軍国主義。当時の政治、社会、経済的な背景の下に考えられねばならぬのは勿論の事だが、何れにしる、都会は、人間の最も尖鋭な智慧が生んだ機能と文明の結実であった。すべての可能性の集まる所、そしてそこから時代がはじまる所。Heym にとっても勿論、その意味で、都会は彼に自由な飛翔を可能にした場所ではあったが、同時に、その都会が、全く不毛な石野、ほろびを一杯にたたえた荒地とも映るのであった。最も多く人間が群がって、最も多く非人間的な都会は、詩人の眼に、最も如実に、没落の相を示すのでもあった。

大工場、機械、立並ぶ家々、雑沓、騒音、資本家、労働者、狂人、囚人、娼婦、病氣、富み、飢え、貧しさ、叫び、吐き気、灰色の空、汚水、ありとあらゆる主義、思想。都会には、すべてのお膳立てがそろって居る。然し、詩人にとって重要なのは、もはやこれらの事実の単なる積みかさね、つながりではなくて、それらのものの Vision だけなのだ。彼の visionär な心の働きは、これら都会の上べだけの華麗な喧騒を透過して、そのかげにひそむ荒涼たる人類の運命の腐蝕を読みとり、或いはむしろ卑小なるもののかげに、直実の人間性を見出したりもする。

Heym は、この大都会に対して、言葉の真の意味に於いての Haß-Liebe を抱いて居た。人間の呪はれた姿の、最も端的なあらわれとしての都会に、

殆んど怒りにも近い憎悪を抱くと同時に、この喧騒と崩壊の世界にこそ、彼は自分の詩の根を養う泉を見出して居たのであった。それは、古典的なリアリズムの均勢のとれた落着きから、程遠いものであるのは勿論、19世紀末自然主義の粗野な Milieu の描写とも異なったものであったし、瞬間の印象にのがれる、言わば無責任な印象主義からは全く絶縁する。

又、この Haß-Liebe は、表現主義の情熱のすぐ後を、その反動の形でおそう Neue Sachlichkeit の文学とも、極めていちじるしく対立する。表現主義と同じく、機能的な大都会の文明を母胎として生れる Neue Sachlichkeit は、もう機械に対する人間の優位を主張しようとはしなくなる。勿論、Neue Sachlichkeit にも、それなりの必然性はある。大戦と言うエネルギーの放出の後で、実用的な単純さ、或いは実用的である事が最も価値ある事だと考へる単純さに、心が向くのは十分に理解出来る。表現主義の熱狂が、決して人間を救うことなく終わったのだから。恐らく Neue Sachlichkeit の思潮を一貫して流れるのは、青年アメリカのイメージであろう。新大陸の理想主義をまだ持ち続けながら、機械、建築、映画、その他の産業組織に、無駄のない、新しい価値を創造して行ったアメリカへの渴仰。この Amerikanisation が、Neue Sachlichkeit の底を流れて居る。Neue Sachlichkeit にとって重要なのは、飽くまでも機能であり、スピードであり、business であり、直線的構成の平明さであり、人間性そのものが、文明の機能性と共に展開して行くと、信じ得る心の無邪気さであった。

この文明の申し子の Neue Sachlichkeit にくらべれば、表現主義は、一時期、大都会の空に咲いたあだ花かも知れぬ。しかし、二十世紀のはじまりを大きくいろどるのは、矢張り表現主義の叫びであったのだ。結局は Vision の有無であろう。Neue Sachlichkeit のオプティミズムは、現代人の思考法、或いは生活のテクニクの中に、そのまま入りこんで居る事はたしかだ。然し、私には、それが、あくまでも時代の思潮以上のものではなく、心をゆり動かすものとは感じられない。ペンミズム、オプティミズムの優劣と言う事でなく、矢張り精神の振幅度、深度の問題であろう。Neue Sachlichkeit も

一つの思潮として、フレッシュな情熱ではあった。然し、それは、事実 (Tatsache) と平静さ (Nüchternheit) への情熱であり、時経れば味なきものとなり、文明への従属的な奉仕者の役目より持ち得なくなる。

1910年に作られたベルリン連作は、この大都会に対する Heym の讃歌である。連作と言えるほど、相互につながりはないが、習作を入れて十のベルリン詩は、1910年4月から、12月にかけて作られた。その中、八つまでが古典的な Sonett の形をとって居り、内容も、最後のものを除いて、比較的落着いて、喧騒と雑沓とアヌイの世界都市 Weltstadt への、言わば肯定的な、フレッシュな印象と言った思いが強い。

勿論、単純に、大都会の雑沓と喧騒の中に埋没して行くのではなく、詩人はむしろ、傍観者の位置に立って居るのだが、三度繰返される世界都市 Weltstadt と言う表現が、この都会に対する、詩人の心の誇りと愛著を感じさせて居る。しかも面白いのは、これらの詩の中に、しばしば、駅の雑沓、列車の進行が描かれる事だ。おそらく当時の鉄道は、Heym にとって、20世紀文明のダイナミズムの具象化であったのだろう。――

汽車の黒い肺が吐き出す、煙の雲は、
春の日のように、ばら色に輝き、
巨大な氷の塊りを、音立てて押し流す
川の上にたなびいて行く。

Rauchwolken, rosa, wie ein Frühlingstag,
Die schnell der Züge schwarze Lunge stößt,
Ziehn auf dem Strom hinab, der riesig flößt.
Eisschollen breit mit Stoß und lautem Schlag³⁰.

と言う書だしではじまる“汽車” Die Züge の詩がある。彼の詩の底から、時々、憧れのように、汽車の轟音がひびいて来る事がある。――そしてベルリンは、世界のすべてのいとなみが、そこに流入し、そこから発して行く停車場であった。その意味で、Heym のベルリンは世界都市であったのだ。何れのベルリン詩も、大仰な身振りはなく、しばしば季節の風物誌めいた作品

であるが、我々に、この世界都市への郷愁を感じさせて呉れる。

ベルリン III

ポイント切替えのために、汽車はしばらくとまって居た。

一つの音が、耳をとらえた。

一軒の古い家の塀から、かぼそい弓の運びで、

三つのヴァイオリンが、おづおづとひびいて来た。

中庭で、三人の男たちが、静かに弾いて居た。

彼等の袖なし外套は、雨に濡れ、

その中の一人は、盲者用の傘を持って居た。

子供達が、そのまわりをとりまいて、立って居た。

屋根裏部屋の、低い窓からは、

老いた男が一人、嵐をつげながら、灰色の空に、

動いて行く雲あしを見て居た。

汽車は動いた。我々は轟音をあげながら、

停車場のホームへと、すべりこんだ。そこは、

世界都市の夕の喧騒、人間の洪水で一杯だった。

Der Zug hielt eine Weile in den Weichen.
 Von einem Tone ward das Ohr gefangen.
 Von eines alten Hauses Mauern klangen
 Drei Geigen schüchtern auf mit dünnem Streichen.

Drei Männer spielten in dem Hofe leise,
 Von Regen waren naß die Pelerinen.
 Der Blinden Schirm trug einer unter ihnen.
 Die Kinder standen um sie her im Kreise.

Indes am niedren Bodenfenster oben
 Ein alter Mann sah auf zum Wolkenfalle
 Die stürmend sich am grauen Himmel schoben.

Der Zug fuhr an. Wir brausten in die Halle
 Des Bahnhofs ein, die voll war von dem Toben
 Des Weltstadtabends, Lärm und Menschenschwalle³¹⁾.

然し、この様な、心情的に詩人のふるさととも言うべき都会が、常に彼を、心地よさにみちびいて居たのではない。ベルリン詩の比較的単純な敘景の底にも、我々は、何か不穏な時代の息苦しさを感じとるのだ。たとえば、次の様な詩行に。

………………。田園風景の中に、
 我々は、巨大な煙突の、夜ののろしを見た。
 ……………。In dem Idylle
 Sahn wir der Riesenschlote Nachtfanale³²⁾.

或いは、

雨は白い壁となって、音立てて降る。
 嵐に吹き散らされるように、雲は逃げる。
 雨あしは、明るい風に吹かれ、
 道の縁に沿って、アスファルトの上を走る。
 磨いた支柱にささえられた街路樹は、
 揺れて、白い葉うらを見せる。
 大ねずみの黒い群のように、
 駐車場の出口の前には、傘の行列。

Der Regen rauscht in einer weißen Wand.
 Die Wolken fliehen, als ob sie Sturm zerbliese.
 Das Regenwasser läuft am Straßenrand
 Und auf dem Asphalt hin in heller Brise.

Die Straßenbäume schwanken an den glatten
 Pfählen, und zeigen weiß den Blättergrund.
 Wie eine schwarze Schar von großen Ratten,
 So stehn die Schirme vor des Bahnhofs Mund³³⁾.

最後に、ぼつんと一つだけはなれて、12月に作られる“ベルリン VIII”では、既に都会は、その生の躍動と華麗さを失ってしまう。これは、その詩の作られた季節の故でもあって、他のベルリン詩が、4月、7月、8月に作られて、その時々明るさと活潑さを持つてののに対し、12月に作られた“ベルリン VIII”は、単なる紋景としても、暗く、黒ずんで行くではあろうが、それとは別に、これは詩人の心の向け方に依る事でもあった。

遠くかなた、はだかの木々、立並ぶ家々、
 生垣、物置の間に、世界都市の波が、引いて行くあたり、
 そして、凍りついたレールの上を、
 長い貨物列車は、重たげに、その身を引ずって進む。

Fern zwischen kahlen Bäumen, manchem Haus,
 Zäunen und Schuppen, wo die Weltstadt ebbt,
 Und auf vereisten Schienen mühsam schleppt
 Ein langer Güterzug sich schwer hinaus³⁴。

詩人の心に、冷い風が一吹きすれば、この世界都市の表情が一変する。今まで大地をならしながら進んで来た汽車は、突然、時がとまったように、その轟きを失って、よたよたと身を引かずって行くだけになってしまう。詩人の眼に眺められた都会の壮大さは、徐々にくづれて、ただの巨石の荒野と変わり、生の息吹きは、ゆっくり淀みはじめて、何時しか、死の吐く息にとって変わられる。私には、詩人の眼にうつる映像が、その視線の強さにたえられず、崩壊しはじめ、遂に、詩人の心象の Vision へと転化して行く過程が、はっきりわかる。Heym は、その愛してやまぬベルリンを眺めて、全く無気力な、死の鳥の黒い翼の影に蔽はれた都会の映像を得たのだ。

ベルリン VIII に描かれる negativ な都会像が、詩人の passiv な受とり方から、都会への呪詛と言う aktiv な発想へと変って行くのは、都会っ子 Heym の Vitalität を思へば、何の不思議もない。それは、彼の死の Vision と重なって、やがては、世界観的な崩壊感へと深まって行く。それは、或る時には次の詩行のように静かでもある。

.....

そして更に遠くへと。夕闇が、島の木立のまわりに、
 黒い冠を置くあたり、そして、葦のしげみに、
 波が、にぶく打ち寄せる所。

何もない西空に、月の光のようにつめたく、
 煙はまだ残って居る。丁度、死者達の行列が、
 鈍色にびの空を、ほの薄く、動くともなく進んで行くように。

.....

Und wieder weit hinaus. Wo Dämmerung legt
 Den schwarzen Kranz um einen Inselwald,
 Und in das Röhricht dumpf die Woge schlägt.

Im leeren Westen, der wie Mondlicht kalt,
 Bleibt noch der Rauch, wie matt und kaum bewegt
 Der Toten Zug in fahle Himmel wallt³⁵⁾.

私は、Heym のこの様な静謐な叙景が非常に好きだし、案外、このような所に、彼の真骨頂があるのではないかと思ったりもするのだが、少なくとも、二十四年だけの地上の生命より与へられなかった Heym の切迫さは、到底、この沈思のみを彼に許しては置かなかった。これはベルリンを流れ、やがて詩人がその水中で死ぬ Havel 河の光景である。

かくして、今や、Heym の描くのは、大都会の呪はれたみじめさである。その苦悩、嘔吐が、黙示録的な恐怖とはげしきで、書きつづけられる。時に、天際に警告の光が輝き、人間の頭上に、熱い灰がまき散らされても、既にその予兆を判じ得る者は居ない。詩人のペンミズムは、その Vitalität とからみ合って、地底的な陰うつさを帯びて来る。

私は、Heym のこの都会呪詛のはげしきに、時代の転回を前にした若者の焦慮と同時に、自分の立つ現実を自らつき崩して行く詩人の苦悩の純粹さを

感ずる。生命を惜しまぬ所が有るのだ。余り単純に割り切りたいわけではないが、それが国民性の違いなのか、或いは個人的な問題なのか、Heym にしろ、Trakl にしろ、ドイツの初期表現主義者と言われる詩人達は、逃れる事をしない。彼等は、何れも、Baudelaire, Verlaine, Rimbaud を我が師とするが、フランスの詩人達が——言葉の不足を、おそれずに言えば——Dekadenz, 高踏, 耽美と言った方向にそれる事を心得てるに対し、ドイツの若き詩人達は、非常に生真面目であった。これも、勿論、優劣の問題ではない。ただ言えるのは、ドイツ表現主義時代の詩人のいちじるしい青年性——いい意味でも、悪い意味でも——と言う事である。

人間がその権能を失った都会を支配するのは、邪悪と呪いの神としての Dämon である。そしてそれは、自身、断罪への志向を持つ詩人の Vision の招き寄せた神であった。長いが、“都会の神” Der Gott der Stadt をあげて置く。そして、この神が、やがては、世界観的なひろがりを持つ時、戦争神の Vision へと重なり合っていくのだ。

都会の神

彼は、家々の上に、はば広く坐って居る。
 風が、黒々と、彼の額のまわりに休んで居る。
 彼は怒りにみちて、最後の家並が、はるかかなた、
 淋しい野に消えて行く方を、見つめて居る。
 夕、日の神バールの腹が赤く輝く。
 大きな^{まちまち}都会々々が、彼のまわりに膝まづく。
 無数の、教会の鐘が、
 黒い塔の海から、彼の方へ大波のようにひびいて来る。
 コリバントの踊りのように、何百万の人間の音楽が、
 街々に、音高くとどろく。
 煙突の煙、工場の雲が、
 香煙が青くなびくように、彼の所まで立ちのぼる。

彼の眉に、嵐がくすぶる。

暗い夕が、知覚を失って、夜へと移って行く。

嵐がはためき、怒りにさか立つ彼の頭髮から、
はげわしのように、鋭くみつめる。

彼は、肉屋のような拳を、闇の中にのぼす。

彼は、それを振まわす。火の海が、通りをかけぬける。

そして光のもやが、音たてて、

街をのみこむ。やがて、夜が明けそめるまで。

Der Gott der Stadt

Auf einem Häuserblocke sitzt er breit.
Die Winde lagern schwarz um seine Stirn.
Er schaut Voll Wut, wo fern in Einsamkeit
Die letzten Häuser in das Land verirrn.

Vom Abend glänzt der rote Bauch dem Baal,
Die großen Städte knien um ihn her.
Der Kirchenglocken ungeheure Zahl
Wogt auf zu ihm aus schwarzer Türme Meer.

Wie Korybanten-Tanz dröhnt die Musik
Der Millionen durch die Straßen laut.
Der Schlote Rauch, die Wolken der Fabrik
Ziehn auf zu ihm, wie Duft von Weihrauch blaut.

Das Wetter schwelt in seinen Augenbrauen.
Der dunkle Abend wird in Nacht betäubt.
Die Stürme flattern, die wie Geier schauen
Von seinem Haupthaar, das im Zorne sträubt.

Er streckt ins Dunkel seine Fleischerfaust.
Er schüttelt sie. Ein Meer von Feuer jagt
Durch eine Straße. Und der Glutqualm braust
Und frißt sie auf, bis spät der Morgen tagt³⁶.

VI.

そして、この Dämon が、時代のほろびを招き寄せるものとして、apokalyptisch な形姿をとる時、突如、戦争が行手に立ふさがる。それは、彼の死後、二年半を経てはじまる世界大戦の予言と言ってしまうだけには、余りに^{なま}も生の Vision であった。

詩人と言うのは、意識するとしなにかかわらず、しばしば予言者である。地震計の針の如く、先んじて、地底のかすかな震動を感じとり、ほろびの歌をひびかせて人の眠りをさまし、更に、はるかな彼方への洞察のもとに、遠き未来に人間の運命を托そうとする。我がひびきへの共鳴を見出さず、時代に疎隔して行く詩人の言葉は、時に、嘆きとなり、時に、絶望の叫びとなり、時に、世を呪うが如き調子にたかまるが、その底に常にあるもの、それは、愛、まことの悲しみの愛なのである。おそらくここに、我々のうかがい知れぬ、詩人の栄光と悲痛さがあるのであろう。Trakl は、この愛の自覚なくして、しかも最も Hölderlin の系譜をたどるものであるが、Heym も又、その絶望的な情熱のはげしさをもって、Hölderlin の徒であった。

久しく眠って居た彼は、立上った、

地底深くの、ドームから。

半暗の中に、彼は立つ。大きく、そして誰にも気づかれずに、

そして、その黒い手で、月をにぎりつぶす。

Aufgestanden ist er, welcher lange schlief,

Aufgestanden unten aus Gewölben tief.

In der Dämmerung steht er, groß und unerkannt,

Und den Mond zerdrückt er in der schwarzen Hand³⁷⁾.

この彼——戦争の壮大な立上りはどうであろう。神の力に依ってか、人の力に依ってか、久しく地下に封じこめられて居た彼が、今やその眠りから醒めて立上る。その智と平安に奢って、凶を占う術を忘れた人間の眼には、彼の黒々とそびえる姿が、もう認められないのだ。都会の夕の雑沓の中に、未

知の闇が、ひろくその影を落して来る。賑はう広場の人のうずも、やがて淀みつかえて凍りつく。一瞬あたりは静かになり、人は思わず周囲を見廻すが、誰もまだ、その故を知らない。小路で、彼等の肩をつかむものがある。振り回して問うても返答はない。ただ一つの顔が蒼白くかすんで行くだけだ。遠くに、鐘の音が、すすりなきの音をたてる。彼等のとがった顎のまわりで、髭がこきざみにふるへ、街に恐怖の気配がみなぎって来る時、

山の上で、彼はすでに、踊りはじめる。

彼は叫ぶ、さあ立て、お前達戦士よ。

彼が打ち振る黒い頭は、ひびきをあげ、そのまわりには、

幾千のされこうべの鎖が、音高く鳴りながら、たれ下って居る。

Auf den Bergen hebt er schon zu tanzen an.

Und er schreit: Ihr Krieger alle, auf und an.

Und es schallet, wenn das schwarze Haupt er schwenkt,

Drum von tausend Schädeln laute Kette hängt³⁸⁾.

のがれ行く昼の、最後の輝きの中から、彼は巨塔のように歩み出る。既に、流れは血の湯気をあげ、葦原の中には無数の屍、それを求めて、死の鳥達が集って居る。彼は、武器のひびきの中、死者の山で重くされた橋の上に立ち、夜の中へと、野を横切って火を放ちやる。それは荒々しく吠える赤い犬のように、闇の中に走って行き、夜の黒い世界を、くっきりと浮び上らせる。恐ろしき火に、その縁を真赤に照らし出された世界を。暗い平原は、数知れぬ、先のとがった軍帽に埋めつくされる。そして彼は、更に火勢を強めんと、路上に右往左往するあらゆるものを、吐き捨てるように、火の中に投げこみ、焰は、燃えながら森々を飲みこんで行く。黄色い蝙蝠が、木の枝にしがみつく。しかし、彼は、炭焼人夫のように、そのとまり木を切落し、一層はげしく火はうなりをあげて燃えさかる。

大きな^{まち}都会が一つ、黄色い煙につつまれてくづれ、

そして、音もなく、口を開いた奈落の底へと、のみこまれて行く。

然し、彼は巨人の如く、燃えさかる廢墟の上に立つ。

荒れ狂う天に、三度、その炬火^{たいまつ}をまわして、

嵐に、ちぎれた雲の照り返しの上、

死の闇に、冷たく荒れ果てた天に向って。

更に、この業火が、広き夜を、焼きつくし、

瀝青と火が、ゴモラの上に、したたり落ちよと。

Eine große Stadt versank in gelbem Rauch,

Warf sich lautlos in des Abgrunds Bauch.

Aber riesig über glühnden Trümmern steht.

Der in wilde Himmel dreimal seine Fackel dreht,

Über sturmzerfetzter Wolken Widerschein,

In des toten Dunkels kalte Wüstenein,

Daß er mit dem Brande weit die Nacht verdorr,

Pech und Feuer träufet unten auf Gomorrh³⁹⁾.

未完ではあるが、十一節のこの詩には、ほろぼすものとして、擬人化——或いは擬神化された戦争の、根源的な暗黒が、詩人の絶望的な Vision にうつし出されて、残す所なく描かれて居る。それは、この世の榮えをほろぼすと共に、そのほろびをもほろぼすものであり、呪われたものであると同時に、呪いを呪うものでもあった。この地底の力を呼び出す事が、死と没落の詩人、大都会の嘔吐を歌う詩人、しかも現世的な活力を十分にそなえた詩人 Heym の、殆んど運命的な必然でもあったのだ。或いは、この世での使命であったのかも知れない。

やや印象主義風に、Liliencron の戦場詩を思わせる次の詩の紋景の簡潔さは、嘆きもなく、怒りもなく、むしろそれ故に、戦闘の非情とむなしさを、極めて明瞭に描いて居る。既に 1910 年の秋 9 月、如何なる予感のもとに、この詩は生れたのであろう。予感と言うより、もはやそれは、体験された世界である。東方の門より、あけそめる曙光は、何の光であろうか。ただに希望ではあるまい。その光に照し出されるものは何であろう。或いは、照すべ

きものもない、空しい (leer) 光であろうか。

戦いのあとに、

五月の畑、緑の畦、花を寐床にして、

所狭く、しかばねは、よこたわる。

投げ出された武器、輻のない車、

引くりかえった、鉄の砲架。

黒く、赤く、焦茶色の野の道を蔽う水たまりから、

血の湯気があがる。

朝まだきの空に、脚を突張って、

たおれた馬の腹が、白くふくれあがって居る。

冷い風の中に、なお、死に行く者達の泣き声が、凍りつく。

その時、東の門を、おしあけて、

蒼白い輝きがあらわれる。緑色の微光、

素早く走る曙の、細い帯。

Nach der Schlacht

In Maiensaatn liegen eng die Leichen,

Im grünen Rain, auf Blumen, ihren Betten.

Verlorne Waffen, Räder ohne Speichen,

Und umgestürzt die eisernen Lafetten.

Aus vielen Pfützen dampft des Blutes Rauch,

Die schwarz und rot den braunen Feldweg decken,

Und weißlich quillt der toten Pferde Bauch,

Die ihre Beine in die Frühe strecken.

Im kühlen Wind friert noch das Gewimmer

Von Sterbenden, da in des Osten Tore

Ein blasser Glanz erscheint, ein grüner Schimmer,

Das dünne Band der flüchtigen Aurore⁴⁰⁾.

非常に、この詩は色彩が豊富だ。それが一面、印象主義風な、絵画的な効果をあげて居る事もたしかだが、一方では又、極めて不安定な、何時、どこから、引裂くようなはげしさが、生ずるかも知れぬと言う、言わば静けさの不安をも予感させる。Heym は、Gogh の色調に親近を感じて居るのであるが、この詩の平静さを成立たせて居る、諸形象の色彩のかげには、あきらかに Gogh への予想があると思われる。如何にして、Gogh の色調を、詩の中に移すか。それは、疑いもなく、Heym の目指したものであった。

この詩に於ては、状景が、詩人の Vision へと深まって、更にそれが再び、現実の紋景へと戻って来て居るのだ。これは、言葉では解き得ぬ事であり、詩の不思議、詩人の心の不可思議と言うべき事柄になるであろう。この時、詩人は、その意識とはかかわりなく、神の座につくのだ。

然し、Heym にとって、戦争とは、一体何であったらう。彼が、戦争の Visionär であった事はわかる。そして、ここで描かれるのは、単に、戦争と言う一つの事象、乃至はそれへの予感だけではなくて、時代の下降、没落、解体、崩壊と言う世界観的な洞察だと言う事もわかる。然し、それでも矢張り、彼にとって、戦争とは何であったのだらう。肯定とか、否定とかが問題なのではない。戦争—カタストロフと言うものへの、彼の情熱が、何れの方向に向いて居たかと言う事なのだ。

勿論、これらの詩を、前掲の、言わば戦争欣求の日記の文章と、単純に結びつけようとするのではないが、時代の Banalität に窒息する詩人は、この戦争の Vision に、一種の息抜き、negativ な救いを見出して居るのではなからうか。これは、精神分析的な意味で言うのではない。戦争がフレッシュなものと感じられる程、詩人にとって、時代は、手あかにまみれて居たのであった。或いは、当時はまだ、戦争が英雄的であり得ると考へられ得たのであろうか。何れにしる、この事こそが、詩人を最も絶望に追いやったものであり、見ように依っては、非常に危険な、戦争への期待を、彼に抱かせたのだった。

“戦争 I” に、ただ、到来する戦争の脅威と、恐怖だけを見るなら、それ

は足りない。戦争一神は、破壊するものであると同時に、救うものでもあるのだ。それは、詩人の言葉に依って、呼び出されたものではあるが、自らもまた、人間に告げ知らせるものである。それ故にこそ、次の祈りが生れて来るのだ。詩人は、自分をも引きくるめて、この世をほろぼす嵐を招かんとする。

戦争のゴム管の上に、坐して居る汝、偉大なる神よ。
 殺戮の息吹きを嚙んで居る、豊頬の者よ。
 明方の嵐の如く、死を解き放て。
 主よ。我々に、火を、雨を、冬を、飢えを、与へよ。

Großer Gott, der du auf den Kiegsschläuchen sitztest.
 Vollbackiger du, der den Atem der Schlacht kaut.
 Laß heraus wie Sturm gegen Morgen den Tod,
 Gib uns Herr, Feuer, Regen, Winter und Hungersnot⁴¹.

そして、この心のはげしさが、戦争の Vision を、言わば Mythos の世界にまで高めたのであった。

Trakl の生涯の最後を飾る、戦場での詩作は、その悲痛なひびきと、Lakonismus とで、常に、我々の心を震わせる。特に、最も最後の作品“Grodek”を前にして、私は、何時も、自分は黙らねばならないと言う気がするのだ。それは、沈黙よりも、はるかにはるかに寡黙であり、ただ、ひびきだけが、ひびいて居ると言ってもよいであろう。それに比して、Heym の先験された戦場詩は、Trakl を想起させながらも、意志的なもの、或いは意識的な自覚を、より多く感じさせる。そこに、二人の詩人の違いが、はっきりあらわれて居ると思われるが、結局、Trakl の描く戦争——ほろびの Vision が、神話的な悲劇性に高まりながら、矢張り Apokalypse の世界であるのに対し、Heym のそれは、apokalyptisch な凄絶さを持ちながら、むしろ Mythos の世界に向って居ると言う事であろう。Heym は、たとへ negativ な意味にせよ、自身一人の戦士であったのだ。

.....

しかし、血なまぐさい日々の、ほろびの上に、
 影の如く、巨大な姿を示して、死は歩み出る。
 そして、かなたの平原から、なお赤く、火のように、
 死に行く者達の、叫びと讃歌が、ひびいて来る。

.....

Aber riesig schreitet über dem Untergang
 Blutiger Tage groß wie ein Schatten der Tod,
 Und feurig tönet aus fernen Ebenen rot
 Noch der Sterbenden Schreien und Lobgesang⁴²).

彼程、戦争——カストロフの到来を、殆んど肉体的な感覚で、予感したものは居なかった。それは、歴史的な必然とか、論理的な判断、或いは政治的な思考や、イズムへの傾きなどとは、全く無関係に、正に、詩人の Vision の力に依ってであった。もはや、戦争の悪などと言う言葉も、ここでは通用しない。善悪の規準では、到底とらえられぬ、原初的なもの、地底にひそむ闇黒の力として、戦争は、詩人の心を、かくもはげしく、震わせたのであった。その dämonisch な神の力をうけて、詩人は、banal な時代を糺弾し、一切をほろぼすものとして戦争を、招き寄せたのだ。“我々の多くにとっては、彼の死と共に、大戦ははじまった。少なくとも回想に於ては、そうである”。Für viele von uns begann damals, mit dem Tode Heyms, der Weltkrieg. Die Erinnerung wenigstens läßt es so scheinen⁴³). と言う、友人の言葉は、その通りのものであったろう。予感、回想に依ってでなければ、たしかめられない。彗星の如く、とく来り、とく去った彼の生涯も、すべての彼の詩と同じように、近づくカストロフへの讃歌でもあり、先んじた挽歌でもあったのだ。

VII.

最後に。若し彼が、不慮の死をとげる事がなかったとしたら、どうであつたらう。勿論、こんな仮定法は、大した意味を持つものではないが、彼の詩も、そして生涯も、まだまだ未完のまま終つたと言う思いが非常に強いのだ。

彼が、水死の運命をまぬがれたとしても、おそらく、二年後に起つた世界大戦が、彼の生命を奪つた事であらう。詩人は、自分の描いた Vision の中に、ほろび去つたに違いない。銃弾に心臓を射抜かれて、恍惚たる陶醉の中に斃れるか。或いは、おそろしき地獄の前味に、心狂わせて斃れるかは知らず。

しかも、更に生きつづけたなら。彼の詩は、どの様な展開を見せた事であらう。その Vision の世界は、絶えず、大都会の石の荒野と、そこへ放り出された人間の運命を、絶えず、地平の彼方より起る嵐の前ぶれを、歌ひつづけたらうか。それとも、合間々々におとずれる、あの平明な詩形式に、憩いを見出して行つたであらうか。或いは、何処かで、神と行き合ふ事があつたらうか。それとも、一層、ギリシャの古代に傾いて、古典主義への道を、辿つた事であらうか。Goethe を、遂に讃える事なく終つた Heym であるが、やがて、古典主義的な完成に、近附いて行つたかも知れぬと言う事は考えられそうである。それとも、Hiller の言う如く、ナチになり得る可能性もあつただらうか。私には、この想像も、それ程、的はずれではないような気がする。いずれは墮落するにせよ、ナチも一つの叫びであつた事はたしかだ。そして、Heym のはげしい Vitalität は、何にでもなり得たのだ。彼が、この世での職とした、法律の仕事以外には。

今更、その死の可否を論ずるのではない。つまらぬ後人の繰り言に過ぎない。然し、Heym の時ならぬ死は、才能の、可能な発展を、芽のうちに、つまみとってしまったには違いないが、同時に、言いうるのは、その未完成が、彼の詩に、類のない、青春の魅力を与えて居るのでもあり、そして、この未完成が——矢張り、彼の完成なのかも知れない。

(昭和 44 年 4 月 30 日受理)

テキストは、Heinrich Ellermann 社の全集四巻 (第四巻 Erläuterungen, Lesarten, Bibliographie は未刊) の中の, Band 1 Lyrik (1964) を使った。日記の文章は、三巻 (1960) に拠る。

参考文献は、以下の諸書だが、大体に於ては、全くの参考程度である。

Erwin Loewenson: Georg Heym oder vom Geist des Schicksals, Verl. H. Ellermann, 1962

Hrsg. von Paul Raabe: Expressionismus, Aufzeichnungen und Erinnerungen der Zeitgenossen, Walter-Verl. 1965

Hrsg. von Hans Steffen: Der deutsche Expressionismus, Vandenhoeck & Ruprecht in Göttingen. 1965

W. H. Sokel: Der Literarische Expressionismus, Langen-Müller Verl. 1959

Otto Mann: Deutsche Literaturgeschichte. C. Bertelsmann Verl. 1964

Albert Soergel-Curt Hohoff: Dichtung und Dichter der Zeit II August Bagel Verl. 1963

註

- 1) この事については、“ゲオルク・トラークル——ほろびの詩人——”(専修大学論集 第2号)に、いくらか詳しく書いた。
- 2) Expressionismus hrsg. von P. Raabe S. 32 友人 Kurt Hiller の言葉。
- 3) Bd. III. S. 111
- 4) Expressionismus hrsg. von P. Raabe S. 47 友人 Claire Jung の思ひ出
- 5) “Ophelia” S. 160 1910年11月
- 6) “Die Tote im Wasser” S. 117 1910年8月
- 7) “Der Tod der Liebenden” S. 153 1910年11月
- 8) “Zu hoffen ist nichts mehr…” S. 70 1910年5月
- 9) “Begaufe mich nicht, Frosch…” S. 453 1911年11月
- 10) “Der Schläfer im Walde” S. 40 1910年3月
- 11) “Wie wollten wir in Haus des Todes schlafen…” S. 95 1910年7月
- 12) “Was ist das? Dunkel?” S. 67 1910年4月
- 13) 釈 道空: 死者の書 青磁社 昭和18年。

彼の人の眠りは、徐かに覚めて行った。まづ黒い夜の中に、更に冷え圧するもの
の濃んであるなかに、目のあいて来るのを、覚えたのである。

した した した。耳に伝ふように来るのは、水の垂れる音か。ただ凍りつくや
うな暗闇の中で、おのづと、睫と睫とが離れて来る。

膝が、脇が、徐ろに埋れてゐた感覚をとり戻して来るらしく、彼の人の頭に響い
て居るもの——。全身にこわばった筋が、僅かな響きを立てて、掌、足の裏に到る
まで、ひきつれを起しかけて居るのだ。

さうして、なほ深い闇。ぼつちりと目をあいて見廻す瞳に、まづ圧しかかる黒い
巖の天井を意識した。次いで、氷になった岩牀。両脇に垂れさがる荒石の壁。した

したと岩伝ふ雫の音。……………

記憶の裏から、反省に似たものが浮び出て来た。

おれは、このおれは、何処に居るのだ。……………それから、ここは何処なのだ。

其よりも第一、此おれは誰なのだ。其をすっかり、おれは忘れた。(S. 1~S. 3)

- 14) “Die Hölle I” S. 327 1911年8月
- 15) Bd. III S. 168 9, 10, 1911
- 16) “Mitte des Winters” S. 438 1911年10月
- 17) “Mai” S. 65 1910年4月
- 18) “November” S. 445 1911年11月
- 19) Bd. III S. 138 5, 7, 1910
- 20) Bd. III S. 130 16, 9, 1909
- 21) Bd. III S. 173 3, 11, 1911
- 22) Bd. III S. 143 10, 9, 1910
- 23) Bd. III S. 157 9, 4, 1911
- 24) 註 2) 参照
- 25) “Ich verfluche dich, Gott…” S. 18 1910年2月
- 26) “<Widmung>” S. 105 1910年7~8月
- 27) Bd. III S. 143 10, 9, 1910
- 28) Bd. III S. 139 6, 7, 1910
- 29) Bd. III S. 164 15, 9, 1911
- 30) “Die Züge” S. 189 1910年12月
- 31) “Berlin III” S. 68 1910年4月
- 32) “Berlin II” S. 58 1910年4月
- 33) “Berlin V” S. 94 1910年7月
- 34) “Berlin VIII” S. 188 1910年12月
- 35) “Die Dampfer auf der Havel” S. 280 1911年5月
- 36) “Der Gott der Stadt” S. 192 1910年12月
- 37), 38), 39) “Der Krieg I” S. 346-347 1911年9月
- 40) “Nrch der Schlacht” S. 124 1910年9月
- 41) “Gebet” S. 356 1911年9月
- 42) “Der Krieg II” S. 360 1911年9月
- 43) Expressionismus hrsg. von P. Raabe S. 19 友人 H. E. Jacob の言葉。